

KU-AP NEWSLETTER

November 2017 vol.5



大学教育再生加速プログラム



学生・教員・職員による SD研修プログラムの開発と実践

教育推進部 准教授 岩崎 千晶

関西大学は2017年度からSDプログラムを開始しました。それ以前にも、関西大学では教職員向けの教育プログラムを提供してきましたが、単発での講義やイベントにとどまっていた。そこで、SDが義務化されたことに伴い、体系的なSDプログラムを開発しました。

本学のSDプログラムの特色としては、まず、職員や教員だけではなく、学生も参加することができる点にあります。2017年度は教育をテーマに取り上げていますが、教育の主役は学生です。授業設計や学習環境について話し合いをする際、教職員が学生の意見を直接聞くことで、これまで気が付かなかった視点を得る機会につながると考えています。また、学生にとっても、授業設計や学習環境に対する自らの意見を伝え、教職員の意見を聞くことで、大学に対する相互理解が深まることも期待できます。さらにTAやSAとして学習支援に従事する学生スタッフは大学のことを知る良い機会にもなり得ると考えました。

次に、学習者にとっての受け身の教育ではなく、学習者が能動的に学習することを推進するために、アクティブラーニングを取り入れ、学習者が体験しながら学んでいけるプログラムを設計しました。たとえば、評価について学ぶプログラムでは評価方法に関する理論を学ぶことに加えて、実際にルーブリックを作成するなどして体験的に評価方法を習得できるようにしました。

加えて、LMS上に提示された映像を授業前に視聴し、提示された

課題に解答するという事前学習の機会を設けました。このプロセスを経ることで、職員、教員、学生がある一定の理解のもとで対面授業での意見交換をしやすくなりました。

また、全5回のプログラムを実施する場所を変えることで、キャンパス内の様々な学習環境に体験的に触れられることができるようにしました。例えば、第1回目は、可動式の椅子机がある教室、第2回目は、ラーニングコモンズ、そのほかにもITセンターや梅田キャンパスでプログラムを開講し、学内で工夫が凝らされている学舎を実際に使いながら学ぶことができました。

このプログラムには毎回平均20～25名程度の参加があり、教職員と学生の割合は、職員が50%、教員が16.7%、学生が33.3%でした。参加者の最終報告からは「職員が講師と担うキャリア・学習支援イベントの提案」や「職員同士をつなげるコミュニティ形成」について具体的な提案が寄せられました。

SDプログラムは、大学をよりよくしたいと考える教職員・学生がつながり、新たな行動を生み出す場づくりをするための土台が形成されている場である必要があります。参加者による、大学をよりよくする企画案を現実の教育に落とし込むには教員・職員・学生の連携が求められます。その壁は低くはないでしょう。しかし、その壁を乗り越えたところに、伝統を超える未来を拓く関西大学の姿があるのではないかと思います。

部会からの報告/The DOTS部会

「The DOTS部会」では、考働力育成のための正課及び正課外プログラムを検討します。

具体的には、①交渉学科目やクリティカルシンキング科目の開設及び運営、②交渉学ワークショップの企画・実施、③アクティブ・ラーニング型授業を行う教員の育成（セミナー・ワークショップの実施、教材開発など）を中心に行います。

第11回交渉学ワークショップを開催しました

7月1日(土)、千里山キャンパスで交渉学ワークショップを開催しました。午前部では、「交渉学の礎となるクリティカル・シンキングを身につけよう!」と題したワークショップを実施しました。午後の部では、計25名の方が参加されました。(社会人8名、関西大学教員3名、研究員2名、職員2名、学生2名、追手門学院大学教員1名、学生7名が受講。)

LAの参加は計8名でしたが、人数調整のため3名は参加者とともにワークを行い、

5名はファシリテーターとしてワークの進行をサポートしました。

午後の部では交渉学をテーマとしているので、午前のクリティカルシンキングの繋がりと交渉学とは何かについて説明しました。参加者の中には熱心にメモを取る方もいらっしゃいました。

本題のワークである「2つのlife clock」は、普段授業で扱っているものをアレンジして今回のワークショップ用に作成しました。

(教育推進部 山本敏幸)

参加LAからの報告書

交渉学では、お互いに信頼関係を築きながらwin-winになるように合意形成をしていくことが目的ですが、今回のワークは「どのような話し合いをしたのか」「お互いにwin-winになる方法を見つけるにはどうすれば良いか」といった過程を重要視しました。したがって最終的に合意形成ができなくても、合意形成のための交渉をされていたので非常に良かったと感じます。

そして最後に「2つのlife clock」のもととなった映画のあらすじを公開し、「そういうことか」という声が聞こえてきたところで第11回交渉学ワークショップは終了しました。

この度の交渉学ワークショップを通して、クリティカルシンキングや交渉学に少しでも興味をもってもらい、次回のワークショップにも是非足を運んでほしいと思います。

(文学部3年 上田綾香)



IBM交渉学研修に参加しました

7月28日(金)、箱崎にある日本アイ・ビー・エム株式会社(日本IBM)本社で、IBM社員による大学生のための交渉学研修が実施されました。本学からは山本敏幸(教育推進部教授)が引率し、学生が4名参加しました(文学部3年 上田綾香、文学部3年 吉江あかり、商学部3年 安井明日香、文学部2年 越智陽菜)。翌日に関西大学東京センターでの交渉学ワークショップに参加を予定していた東京富士大学の学生3名、東北大学高度教養教育・学生支援機構の佐藤智子先生も参加して下さいました。

研修では日本IBMの今日までの顧客との信頼関係の歴史、今の若手社員の考える交渉学、社内の交渉学コミュニティの活動についての熱い思いを共有していただきました。

(教育推進部 山本敏幸)

今回の日本IBMで交渉学のコミュニティを形成されている方々とお話をさせて頂く機会では、人と交渉学の関わりをよく学ばせて頂きました。様々なお仕事や、また子育てをしながら働いている方々が仕事の合間を縫って交渉学のコミュニティを

作り活動されている事には驚きました。また実際にコミュニティに所属されている皆さんの職種や部署の多さは、より多様性のある交渉学の勉強につながるというお言葉もとても印象的でした。

(商学部3年 安井明日香)



第12回交渉学ワークショップを開催しました

7月29日(土)、東京センターで交渉学ワークショップを開催しました。同会場での開催は3回目となりました。趣旨は、日頃、千里山キャンパス、梅田キャンパスで展開している交渉学のワークショップ(社会人、関西地区の大学生、本学の学生が対象)を年に1度は関東で開催することです。関東地方でご活躍の本学の卒業生、関東地方の大学生の皆さんと、これからの社会人基礎力、考動力の礎となる交渉学を協働で学ぶことを意図しています。

午前の部では、各大学におけるアクティブラーニングの状況について、学生目線による主体的な学びの実践事例をポスターセッションで報告・共有をしました。関西大学からは6名の学生が参加し、4枚のポスター発表をしました。

東京富士大学からは隅田先生のゼミの学生が交渉学の取り組みについて、東北大学

学習支援センターと福島大学総合教育研究センターからは学修支援プロジェクトについて、追手門学院大学からはアクティブラーニングの取り組みについて、関西学院大学からはハンズオン・ラーニング科目「社会探究実践演習」についてポスター発表がありました。

午後の部では、多者間交渉(三方良しの

交渉学: win-win-winの信頼関係構築)をテーマとし、学生と社会人が混合チームを構成し、プロジェクトベースドラーニング形式で交渉学のワークショップを行いました。具体的には、教材コンテンツ開発、ワークショップ企画を学生と社会人が協同で行いました。

(教育推進部 山本敏幸)



部会からの報告 / 教育・学修成果部会(TLA部会)

「教育・学修成果部会(TLA部会)」では、学修成果の可視化に向けた評価指標の開発や間接調査・直接調査を検討します。具体的には、①学修行動・到達度調査の項目検討・実施・分析、②コモンルーブリック開発及び開発に向けた調査、③学修コンシェルジュ育成のためのSD研修を中心に行います。

初年次教育アンケート調査を実施しました

本学におけるルーブリック導入科目に関する実態把握を目的として、共通教養科目「スタディスキルゼミ」および一部の学部初年次教育科目の受講生を対象にアンケート調査を実施しました。

ルーブリックとは、評価観点の段階レベルを文章で示した評価ツールを指し、評価を効率化し、また学生の学びを促す効果があります。

本アンケートでは、おもにライティングに関するルーブリックの効果を検証するために、

ルーブリックの活用実態とともに、ライティングに対する学習状況や取組意識の調査をしました。具体的には、ルーブリックの活用のタイミングや活用方法、活用時に感じた点を選択式で尋ねたほか、ルーブリックを活用して課題に取り組んだ際に感じたメリット・デメリットを自由記述で尋ねました。さらに、ライティングへの学習意欲を確認するために、この授業で身に付いたライティング力やライティングへの取組意識についても合わせて確認することで、ルーブリックの活用のあり方について明

らかにするものです。

収集したデータは、本学におけるルーブリック活用支援への検討資料や、教育プログラムや研修を実施する際に活用するとともに、学会発表での活用やセンター紀要(『関西大学高等教育研究』)への投稿等を通じて、フィードバックを計画しております。

本アンケート調査の効果的な運用と活用を通じ、よりよい教育環境づくりに邁進してまいります。

(教育推進部 千葉美保子)

入学時・卒業時調査の報告を行いました

「入学時調査2017」及び「卒業時調査2016」の速報値結果の概要に関して、6月～10月の期間に各教員に報告を行いました。今年度は、全13学部の教授会や執行部会にて説明をしました。本格実施の3年目である入学時調査は、大学生活のスタート時点での把握であり、全学部において記名方式をとるとともに、8学部において学部独自の項目を導入した年度でありました。卒業時調査に関しては、学修成果を得ることを期待して入学してきた学

生たちが、どのように大学で学び、成長したのかを知るためのベースとなるものであります。今年度から、教学IRプロジェクトが主体となり、前年度までの自己点検・評価委員会による項目と合わせた調査項目で実施しました。

報告では、入学時調査では主に、入学時の満足度、高校時の経験、入学時の学生特徴、国際性の観点で、卒業時調査では主に、卒業時の満足度、大学での学び、進路の観点で、各学部の特徴であろう内容を、所見としてまと

め説明しました。短い時間での報告ではありましたが、結果に関して教員同士で議論されたり、質問や意見、追加の分析要望が出されたりしました。これらの自学部の学生に関する調査結果に関して、入学時と卒業時の学生たちの現状を教員間で共有して、教育について改めて考える契機となったのではないかと思います。今後も、教学への活用のために報告や資料をとりまとめていくことを推進していきます。

(教育推進部 紺田広明)

第14回日常的FD懇話会

「CTL教員は見た!大学ランキング アジアNo.1シンガポールにおける大学の今、学生の学びを深めるあの手・この手」を開催しました

5月26日(金)に、第14回日常的FD懇話会を開催しました。今回の日常的FD懇話会では、2017年3月に教育推進部が実施したシンガポール国立大学(NUS)、シンガポール工科大学(SUTD)、ナンヤン工科大学(NTU)、国立教育研究所(NIE)、計4校の視察報告を行い、教職員計22名の参加がありました。

大学ランキング(THE2017)においてアジア1位となったNUSを筆頭に、シンガポールは高い教育水準を有し、国際競争力においてもアジアトップとなっています。本懇話会では、上記4校の学習環境(ラーニングコモンズやアクティブラーニング教室)、教育プログラムの最新情報を学内教職員に共有し、本学における新たな教育プログラム、学習環境の構築への向けた議論の場としました。まず、学習環境デザインの事例として、NTUの学習施設 The

Hiveの特色と、TEL(Technology Enhanced Learning)の取組を紹介しました。次にカリキュラムデザインとして、SUTDの事例を紹介しました。SUTDは、MITのプログラムを導入した2010年設立の新設大学です。カリキュラムの特色として、とりわけBig-D(Big-Design)プログラムの事例を紹介しました。「デザイン」には、建築や製品など、すべてのデザインが含

まれ、このプログラムはさまざまな分野を横断するデザイン・プロジェクトです。そして、NTUの自治的機関であるNIEの教員養成カリキュラムと、NUSのCDTL(Center for Development of Teaching and Learning)におけるFD活動事例を紹介しました。今後も国内外の先進事例の収集と共有に努めてまいります。

(教育推進部 千葉美保子)



第15回日常的FD懇話会

「学生の理解度が即時にわかる!スマホdeクリッカー!」を実施しました

6月21日(水)12時20分より、第15回日常的FD懇話会を開催しました。クリッカーとは、意見の分布結果が即時にフィードバックされ、スライドに表示できるシステムです。

岩崎から、関西大学で現在クリッカーを利用している授業実践例と、利用に際する手続きについて報告をしました。たとえば、授業を受けるにあたり知っておいてほしい用語についてのクイズを出します。選択肢は「説明できる、わかる、なんとなくわかる、聞いたことがない」などで

す。こうした質問をすることで、学習者の前提条件(レディネス)を確認することができます。また、授業後に小テストを出すことで、授業の理解度を確認することができます。あるいは、クリッカーを使って事前に実験結果を回答させたうえで、実際に実験をする。その後、事前に考えた意見と実験の結果を比べることで、学びを深めることができます。このように授業の目標に合わせてクリッカーの利用方法は様々です。先生の授業目的に応じた使い方を選択い

ただければと思います。ご質問等がありましたらCTLまでお気軽に!

その後、本学が導入しているキーパッドジャンの玉井氏より、新しくなったクリッカーの機能について紹介がされました。先生方から質問をいただき、意見交換をさせていただきました。秋学期も日常的FD懇話会を企画しております!奮ってご参加ください!

(教育推進部 岩崎千晶)

事務局より

本取組が開始されて3年が経過しました。文部科学省からの補助を受けるにあたり、中間評価や数値目標の達成など、超えなければならない試練に、日々教職協働で取り組んでいます。

その結果、交渉学がキーコンテンツとなることにより高次のコミュニケーション能力を育む授業内外の教育プログラムが充実したり、学修行動調査やルーブリックの普及などにより学修成果の可視化

が推進されたりしました。まさに、本学の教育・学習の発展を加速させる取組になっているといえます。

ただし、取組の成果はそれだけでないと考えます。取組を通じて、教員と職員の、あるいは、教育推進部と各学部・研究科の対話の機会が広がったことにも価値があると考えます。さらに、本取組を推進するために着任いただいた教員やスタッフから学ぶ機会を得たりすることもできました。このような新たなネット

ワークや学びといった、かけがえのない財産を得られたこともまた、成果といえるのではないのでしょうか。

残念ながら今後、補助金の通減が予想されますが、取組を通じて築くことができた教育・学習のネットワークは通減することなく、むしろ広がりが加速することを願ってやみません。取組担当者の1人として、これからも本学の教育・学習の発展に貢献し続けていきたいと思っています。(竹)



KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

E-mail: ap-info@ml.kandai.jp

教育開発支援センター <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

AP取組 Web サイト <http://www.kansai-u.ac.jp/ap/index.html>

発行日/2017年11月 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター